

國忠助と稱す。其子二代光國忠助、其子三代光國善三郎、其子四代光平忠右衛門、貞享の比存生。とありて、陀羅尼の別家なり。加越能鍛冶由來考に、光平は將監家次流にて、元祖勝家より六代忠右衛門と云ふ。と見ね、享保五年幕府への上申書にも、光平忠右衛門は二代目將監家次流にて、

先祖勝家より光平迄六代家業相續、今以打物細工仕。と載せられたり。又享保五年正月光平忠右衛門の由來書に、高祖父家重善三郎は天正の頃病死。曾祖父光國忠助は家重善三郎の二男にて、利長卿の時打物被仰付、利光卿の時奥村因幡を以て、御諱の光字を拜領仕、光國と改、寛永年中に病死。祖父光國善五郎と云ふ。父光平忠右衛門儀は、最初光國と銘打候處、其後光平と改、利常卿小松に於て大身鎗五十筋・中身鎗百筋打立方被仰付時、服・綿等拜領仕。とあり。按ずるに、寶永七年の鍛冶由來書には、勝家忠助儀、利常卿の時奥村因幡を以て、御實名の光字を下し賜はり、光國と名乗。とあり。されば其の初め勝家と稱したりと聞ゆ。おもふに刀鍛冶に藩侯の諱の字を賜へるは、光國一人といふべし。利常卿初め諱を利光と稱し給へる故也。三壺

記追加に、寛永六年四月廿三日利光卿江戸上屋敷へ、御客衆酒井讚岐守殿御出入衆被爲入、御咄の次で中納言利光卿被仰は、我等名乗利光と申せ共、今日より利常に改候旨御意也。とあり。鍛冶勝家に光の字を賜はるは、其の以前なる事いぢるし。

○鍛冶家忠傳

刀鍛冶系圖に云ふ。初代家重善三郎の三男家忠吉兵衛、其子二代目家忠吉兵衛、此子三代目家平吉兵衛、貞享之比存生。又二代目家忠の弟吉家吉右衛門、初め吉重と打。是も貞享の比存生。とあり。加越能鍛冶由來考に云ふ。家忠は將監家次流にて、三代目勝家の子を家重といへり。其子家忠吉兵衛と號す。其子二代目忠家、其子三代目四郎兵衛家忠也。後幕府へ献上し給ふ御太刀を打ち、忠の字將軍家の御諱につかへて、家平と改む。とあり。享保五年幕府への上申書に、家忠四郎兵衛は二代目將監家次流にて、先祖勝家より當家忠まで五代家業相續、今以打物細工仕。とあり。同年正月家忠四郎兵衛の由緒書に、高祖父勝家三郎右衛門は二代目將監家次の弟子、是より陀羅尼と打。曾祖父陀羅

尼家重善三郎天正之比病死。祖父家忠吉兵衛は家重善三郎の嫡子にて、別家仕るに付、銘家忠と改稱、高德公・瑞龍公・微妙公・陽廣公御代々打物御用被仰付、承應四年に病死。父家忠吉兵衛は寛文十年病死。當家忠四郎兵衛は、最初國平吉兵衛之養子に罷成處、吉兵衛實子出生、以後二代家忠吉兵衛之子分に罷成、別家仕。とありて、是も陀羅尼鍛冶の別家なり。故に三壺記に、陀羅尼鍛冶吉兵衛の弟六藏といふ者、金澤山崎町田上屋彌右衛門が妻と密通し、彌右衛門を殺害するに依つて、天和四年の春泉野に於て釜煎の刑に處せらるとある吉兵衛は、初代の家忠吉兵衛なる事いぢるし。彼の六藏は則ち家忠の弟也。

○鍛冶國平傳

加越能鍛冶由來考に云ふ。國平は二代目將監家次流にて、勝國と同流なり。元祖勝家より吉兵衛國平迄五代にて、國平の子は吉左衛門家弘と云ひ、松雲公の時代也。と見ね、享保五年幕府への上申書に、國平吉兵衛は二代目將監家次流にて、先祖勝家より當國平迄五代家業相續、打物細工仕るに付、寶永七年朝鮮人來朝之節、御太刀・御長刀被仰付・打

立申候。近年病身に罷成、當時難仕。とあり。又國平吉兵衛悻家弘吉左衛門、父國平吉兵衛より致傳授、今以打物仕。とあり。また同年正月國平の由緒書に、祖父家忠吉兵衛、父家平四郎兵衛天和三年に病死。國平吉兵衛は近年病身に罷成、當時打物細工不仕。と記載す。是も陀羅尼鍛冶の末流にて、此の子孫後々まで連綿し、天明三年の飛鳥川記に、御刀鍛冶二拾俵鍛冶町洲崎吉左衛門國平とあり。

○鍛冶友重傳

賞劍定則に云ふ。元祖藤嶋友重は、本國越前吉田郷藤嶋といふ處の人にて、來國俊の弟子なり。嘉曆・正和の頃加州石川郡泉村に居住し、建武四年に四十九歳にて死す。二代友重は貞和の頃の人にて、是も泉村に居住し、應安三年五十二歳にて死す。三代友重もまた同所に居住す。といへり。加越能刀鍛冶系圖に云ふ。元祖藤嶋友重、本國越前藤嶋之住人、應永之頃加州石川郡泉村に來住。二代友重・三代友重共に泉村に居住。四代友重號右衛門。五代友重號次兵衛。六代友重號次兵衛、寛永之頃金澤居住。七代友重號三郎右衛門、貞享之頃存生。とあり。加賀古跡考には、友重